



三重県公立小中学校教頭会  
〒514-0003 津市桜橋 2 丁目142  
教育文化会館別館 3 階  
TEL 059 (228) 2340  
FAX 059 (228) 2271  
E-mail:mieheadt@hyper.ocn.ne.jp

# 重 点 取 組

(単位教頭会より)

## 地域の経験した災害「伊勢湾台風」から学ぶ

桑名郡・桑名市教頭会 桑名市立城南小学校 栖村 太志

桑名市をはじめとする東海地方に、死者・行方不明者が5,000人を超える被害をもたらした伊勢湾台風から、今年で61年になる。桑名市立城南小学校では、4年生の社会科と総合的な学習の時間を中心に、伊勢湾台風の学習を行いながら、防災学習を行っている。

### (以下は昨年度の取組)

まず、城南地区の地域の方と、伊勢湾台風について語り継ぐ「あかりプロジェクト桑名」のみなさんをお招きし、当時城南地域はどんな様子だったかを話していただいた。子どもたちは、自分たちの住んでいる地区の名前も出てくる話や、涙ながらに当時の話をされる地域の方の様子に、しっかりと聞き入っていた。

次に、過去の災害を現在にどう活かしているのかを知るために、桑名市役所の防災危機管理課の方から、この城南の地域はいかに土地が低いのか、避難をどう考えればよいのかについて、伊勢湾台風のことも交えながら話していただいた。

最後にまとめとして、自分の命を守るためにこれからどうしていけばよいのかについて、「城南フェア」で全校児童・保護者・地域のみなさんの前で発表をした。この取組を継続することで、5・6年生は自分たちが学習したことを思い出すことができ、1～3年生は、これから学

習していくきっかけとなる。

また本校では、津波警報が発表され、津波到達までに90分が見込まれる場合を想定しての避難訓練を行っている。全校児童で津波到達ラインの海拔5mの場所をめざして、最後尾が90分以内で到着できるのかを全校児童で歩いた。その際も、保護者の方はもちろん、登下校の見守り隊の方や消防団の方など、地域の方にもたくさんの方の協力をいただくことができた。

本当に普通の取組である。その普通の取組でさえ、行うことが難しい今の状況が改善されることを願いつつ、この地域で生きていくからこそ、地域の経験した災害「伊勢湾台風」から学ぶことを通じて「命を大切にする」子どもたちを育てていきたい。



## 9名の新しい仲間を迎えて、さらにパワーアップ!

員弁郡・いなべ市教頭会 いなべ市立藤原小学校 宮崎和久

員弁郡（東員町）・いなべ市には23の小中学校（小学校17校・中学校6校）があります。今年度、員弁郡・いなべ市教頭会では9名の新任教頭を迎えました。

私たち員弁郡・いなべ市教頭会は、今年度、3つの基本方針を掲げ、取り組みを進めています。

- ① 変化の激しいこの時代の中で、教育者としての教養と専門性を磨き、学校の管理・運営者として必要な能力を高める。
- ② 「生きる力」と「豊かな人間性」を育成するための教育実践に努める。
- ③ 員弁郡・いなべ市教頭会の活力を高め、組織の発展・強化に努める。

3月より、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う学校では長期に渡る臨時休業や、その対応の中での卒業式・入学式の実施、授業の未履修等、私たちがこれまでに経験したことがないことが次々と学校現場に押し寄せ、その対応に追われた年度末、新年度の始まりでした。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため諸会議や出張が中止となっていく中でも、こんな時だからこそ員弁郡・いなべ市教頭会が集まり、課題を共有し、学校の管理・運営者として大切にしていかなければならないことなど、話し合



いを定期的に持ちました。特に、9名の新しい教頭にとっては、学校の要となっていくだけではなく、悩みや不安を学校という枠を超え、相談したり、互いの学校の情報を交換したりと、教頭みんなで一人ひとりを支えあう場となっています。

今年度は、基本方針③「員弁郡・いなべ市教頭会の活力を高め、組織の発展・強化」に向け、さらに一歩取り組みを進めます。それは、「管理職を旨ざす教員のための学習会」の実施です。「教頭」という仕事や役割を少しでも知ってもらい、より多くの教員に管理職を旨ざしてほしいこと・力をつけてほしいことや、学校が教職員みんなで支えあっていること（「チーム学校」として学校が動いていること）を改めて実感してもらおう会にしたいと思っています。

## あすなる教室に期待

四日市市中学校教頭会 四日市市立南中学校 山下英樹

新型コロナウイルスの対応に追われる日々である。4、5月が臨時休業となったため、生徒が楽しみにしていた自然教室や修学旅行等の行事は延期や中止となった。また、授業時数確保のため、夏休みは縮減された。四日市市では、今年度から普通教室にエアコンが設置されたので、涼しい教室で授業が行えるのがせめてもの救いである。

過去3年間の四日市市の中学校の不登校生徒の発生率は、3.5%前後で、不登校生徒数は300

人前後で推移している。本校の不登校発生率は、減少傾向にはあるものの、四日市市のそれよりも高い傾向にある。今年度のコロナの影響は、不登校の生徒をさらに増やしてしまう可能性が高いのではないかと、大変心配している。

四日市市には登校サポートセンター「ふれあい教室」があり、不登校生徒やその保護者に寄り添い、学校復帰に向けて支援を行っている。「ふれあい教室」での取り組みが生徒の自信になり、学校への復帰につながった生徒も多くな

る。

本校では、今年度から校内に登校サポート教室「あすなろ教室」を開設した。常勤の教諭が専属で教室を運営し、学校や教室に足が向きにくい生徒の支援を始めた。普通教室や保健室以外に過ごせる場所ができたことで、学校へ来やすくなった生徒がいる。個に応じた丁寧な支援が行えるので、表情が明るくなった生徒がいる。昨年度は職員室で朝の挨拶のみをして下校していたが、今年度は朝8時半までに登校し、「あすなろ教室」で自分のペースで学習を進められるようになった生徒がいる。また、担当教員は保護者との面談も行い、保護者のケアも行っている。担任と連携を取り、担任と生徒の関係も大切にしている。専属の教員以外にも「あすなろ

教室」で学習支援を行っている。「ふれあい教室」とも連携し、段階的な支援の方法について情報共有を図っている。

「あすなろ教室」の取り組みを、本校の不登校生徒の教室復帰につなげていきたい。



## Zoomの運用を進めてみて

志摩市教頭会 志摩市立浜島小学校 大主孔明

浜島小学校は、志摩市西部にある浜島町唯一の小学校である。小規模校で全校児童は85人。落ち着いた雰囲気の中で学習活動が行われている。その浜島小学校も、今年度は他の学校と同じように、3月から続くコロナ禍によって自宅学習を余儀なくされた。週に1回の家庭訪問を担当の先生にしてもらってはいたが、更になにかできることがないかと考え、かねてから検討課題に挙がっていた、Zoomでの子どもとのやりとりにトライすることとした。学校にあるパソコンでZoomが使えるパソコンを探したところ1台だけあり、市の総合教育センターから職員を派遣してもらい学校のIDを作成して設定することができた。実際に繋いでみることで、6年生の担任にネット環境の調査をしてももらった。6年生15件全てで繋げそうだというこ

とがわかり、次は再度市の総合教育センターと連携して、子どもや保護者が家で端末を操作してZoomが繋がれるように「操作ガイド」を作成し配付した。

1回目の「Zoomによる朝の会」を5月15日(金)に行った。9時からの開始であったが、予定時刻より早く何人かの子どもたちが接続を始めて、14人の児童と接続して話すことができた。しかし、なかなかうまく接続できなかったり、音声が聞こえなかったりする子どももいた。その日のうちに担任に家庭訪問をしてもらい、接続するにあたり困ったことについて指導してもらった。おかげで翌週の18日(月)、19日(火)に行ったZoomを使った「朝の会」と健康観察では、スムーズにやりとりすることができた。教師側も、大きなモニターをパソコンの画面と連動させ、Zoomの他の機能も使って前回よりもスムーズに連絡を伝えることができた。

実際にやってみて思うことは、やはり子どもとは面と向かって生の言葉でやりとりできるのが一番、ということだった。しかしそれがかなわないときに、このZoomでのやりとりをすることは、子どもたちを少しでもクラスと繋げておくための力になるのではないかと感じた。今後は更に「授業をする」ということを見据えて、取組を少しでも進めておきたいと考えている。



## つながりを大切に

津市北地区教頭会

津市立千里ヶ丘小学校 松田 敦

私たち津市北地区教頭会は、津市の北部にあたる旧安芸郡の学校で構成される、総数15名の小さな教頭会です。こぢんまりとした組織の特色を活かし、横のつながりを大切に活動を行っています。年間6回開かれる教頭会では、前半は全体での報告、協議、連絡などを行い、後半は3つのブロックに分かれての情報交換を行っています。日頃は業務に追われ、近隣の学校どうしであっても、なかなか連絡を取り合うことができないため、貴重な情報交流の機会となっています。

また、年に1回は研修会も兼ねて行っており、令和元年度は至学館大学の土島久明先生をお招きし、「学校でのリスクマネジメント」と題しての講演を行っていただきました。他所で起こった熱中症事故を検討事例とし、事実から事故の発生要因を探ることの大切さ、事故発生に至ってしまう学校教育の構造的な弱点、リスク軽減のための具体的な手だてなどを説明してくださいました。そして、事故発生につながる人間の行動様式や心理的側面にも言及され、科学的知見をもとにした熱中症事故の未然防止策について提言いただきました。最後に、教育委員会

の通達等に頼るばかりではなく、事前に危機を予測して対応することが必要であると結ばれました。この日に学んだ考え方は、他の学校事故にも応用できることであり、日頃の学校危機管理について見つめ直すよい機会となりました。

さらに、津市北地区教頭会では懇親会を年に数回行っており、これも横のつながりを作るための重要な取組の一つとなっていますが、今年度はコロナ禍により、残念ながら実施できていません。しかし、本当はこのようなときにこそ横のつながりが必要なのかも知れません。年度後半に向け、「学校の新しい生活様式」のもとでの「つながり作り」を模索していきたいと思えます。



## 感染症対策の取り組みと課題

多気郡教頭会

明和町立明和中学校 渡辺 明

明和中学校がある明和町は、人口約23,000人、町の中央には近鉄線が走り、隣接する伊勢市と松阪市とは、経済的にも文化的にも深い関係があります。

江戸時代にお伊勢参りで賑わった伊勢街道が近鉄線と平行に通っており、古くは、伊勢神宮に仕える齋王の住まう所でもありました。齋王制度は、天武天皇の頃から南北朝時代まで660年以上にわたって続き、60人以上の齋王が存在したといわれています。齋王まつりは、齋王が京都から明和町の齋宮まで滋賀県、鈴鹿峠を越え5泊6日で群行した姿を再現したものです。

現在、明和中学校区には、6つの小学校があり、本校の生徒数は、8月現在604名で県内で

も大規模校です。昨年度の12月には、60年以上お世話になった校舎に別れを告げ、新校舎開校式を行い、新たな気持ちでスタートしたところです。

さて、昨年度末から新型コロナウイルスによる感染症の恐怖が全国規模で押し寄せ、子ども達の安全を第一にした取り組みが、どの学校においても行われています。

本校でも、「明和中学校感染症対策ガイドライン」を作成し、1日の学校生活・家庭での注意点・お願い等をまとめ、取り組んでいます。日常的には、登校時各学年の昇降口に受付を設置、担任が当番で点検しています。生徒は健康観察表をクラスのカゴに提出し、未提出の場合

は、昇降口で検温してから教室に入るようにしています。教室入室前の対策として始めましたが、全校一斉に学年単位で取り組むことで教師の分担がうまくいき、職員の朝の打ち合わせ時は副担任が点検し、必ず誰かが生徒の健康状態の把握に努めています。回収した健康観察表はチェック後、朝学活前に担任が確認しています。

各学年200名ほど生徒が在籍していますが、当初心配していたほど密になることなく全体が新しいシステムに慣れてきたところ です。

また、中学校の職員・生徒や関係者に感染者、濃厚接触者が出た場合、小中学校での動きについても町の教育委員会と話し合いを持ち、マニュアルを作成しました。

課題もあります。例えば登下校時の昇降口、自転車小屋、休み時間等の三密の点検・解消は

難しく、浸透しない部分があります。

終息が見えない中、今後は、さらに生徒自身の自己予防を目指した主体的な意識感覚を育てる取り組みが必要になってくるように感じています。



## 学校の新しい生活様式の中で…

三重郡教頭会 朝日町立朝日小学校 萩原俊一

本校も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、4月15日～5月17日の間は臨時休業となりました。その後、分散登校を経てようやく学校再開となりました。授業再開後は学校の新しい生活様式5.22Ver.1及び6.11 Ver.2を踏まえ、可能な限り感染防止対策に努めた上での学校運営がなされています。一方、約1か月間の学習の遅れを補うよう努めつつ、研修委員長さんが中心となり研究授業も計画的に実施されています。6～7月の間に研究授業（10クラス）と支援学級（5クラス）の授業公開週間が設定され、教員の指導力向上のための研修と児童理解に努めています。（残り18クラスは2学期以降に実施予定）

ところで、先日、関東地方の保育園でクラスターが発生したことを受け、とある保育園で、自然に集まって遊ぼうとする園児に向かって、マスクとフェイスシールドをした保育士さんが「密ですよ!」「離れなさい!」と必死で注意し、園児たちが密にならないよう、かかわらないようにと、悪戦苦闘している様子がテレビで放送されていました。もちろんこの保育士さんも、子どもが遊びや他者とのかかわりを通して育つこと（つく力がたくさんあること）は百も承知であり、感染を防ぐためにやむを得ずの行動をとっているのだと思います。しかし、その様子

を見て、この状況が少しでも早く終わってほしいと強く感じました。

本校の研究授業後の研修会でも、『主体的・対話的で深い学び』の実現を考えたとき、「感染防止対策さえなければ、もっと効果的な学習活動ができるのに…」といった意見も出されます。

「絵を描くのが上手な〇〇さん」「昆虫博士の〇〇さん」「アイデアマンの〇〇さん」…といった具合に、本来、かかわりやつながりの中で、仲間から認められたり、教師が見抜き価値づけしたりすることで「その子らしさ」が輝くものだと思います。感染防止対策を講じつつ、かかわりやつながりは分断しないよう工夫していくべきであると考えています。



## 地域とともにある小学校

津市中地区教頭会 津市立南が丘小学校 大屋 ゆかり

教頭会の「重点取組」ということで原稿の依頼をいただいたのですが、今年度は新型コロナウイルス感染症の対応等で例年にない校務の煩雑さがあり、教頭会の活動を最小限にしています。そこで、代わりに、勤務校の様子を紹介させていただきます。

わたしが南が丘小学校に赴任してすぐの出来事です。体育館に行く途中のふれあいホールの出口で、教室に帰る2年生の子どもたちと鉢合わせになりました。わたしが、道を譲るため横に動くと、一番前にいた男の子が丁寧に会釈をしてくれました。「授業の移動は静かにする」という約束を守った好感度の高い行動ができる



ことに感心しました。元気な挨拶もいいですが、会釈も素敵です。これまでいくつもの学校に勤めてきましたが、本校の子どもたちは、会釈によるコミュニケーションをスマートに使いこなしている割合が高いと感じています。また、保護者の方々との関わりの中でも同じことを感じていたので、子どもたちの行動は、おそらく、周りの大人の姿から自然に身についたものだと思います。

また、本校は、たくさんのボランティアの方に支えられており、地域の教育力の高さを感じているところです。いつもは、ボランティアの方から、「元気のよい挨拶が気持ちいいですね。」などと褒めていただくのですが、先日、「声をかけても返事もしない。」という声を聴かせていただきました。「でも、今の子はいろいろあるし、そんな時期もあるわな。」と続けられ、ボランティアの方が、子どもたちの内面まで理解しながら関わってくださっていることにあらためて気づかされました。

これからも、保護者や地域の方々に学ばせていただきながら、ともに子どもたちの教育に携っていきたいと思っています。

## 紀南教頭会の活動報告

紀南教頭会 熊野市立金山小学校 寺本 育史

今年度は新型コロナウイルス感染拡大予防のため、紀南教頭会においても多くの活動が中止や短時間での活動となっている。中でも定期総会、懇親会の中止は2つの意味において残念なことであった。

1つは、当然のことながら今年度の紀南教頭会の活動を推進していくための、「計画の確認」「意識を全体で共有」などの貴重な場・時間が取れなかったことである。書面での決議に置き換え形式は整っている。しかし、例年においても定期大会の提案時間にしか議案を読む時間が取れない現状である。自分を含め、何人の方が

議案を読むことに時間をかけられたのか？今年度の活動のまとめをする前に、改めて精読したいところである。

もう1つは、新しく紀南にみえた教頭先生との交流ができなかったことである。紀南には県内の様々な地域から管理職として来られる方が多くみえる。各校の情報交換をする中で、遠く紀南に来ていただいた教頭先生には、それぞれの地域での研修の持ち方を教えていただくなど、経験に基づいた貴重な示唆をいただくことが多かった。また、「紀南ではこれまでどのような研修の進め方をしているのか」を交流しあう中

で、それぞれの長所・短所を出しあいつつ、各校での教頭としての取組に向けて研修を深め合ってきた。

三重県最南端の紀南教頭会。「県内の状況を知る」だけでなく、「紀南の取組」を県下に発

信する交流の会が紀南教頭会の持つ一面でもある。今後も紀南教頭会への温かいご支援をお願いするとともに、各地教頭会の更なる発展を祈念して紀南教頭会の活動報告とさせていただく。



熊野の海と山

## 小学6年生で「オンライン朝の会」を実施！！

伊勢市教頭会 伊勢市立豊浜東小学校 奥田 恭子

5月、新型コロナウイルス感染症対策のため臨時休業が延長されたことにより、子どもたちに、ますますのしかかる不安やストレス、悩みに応えようと、休校中も市内の小学6年生が持ち帰って日々の学習に使用していたタブレット(iPad)を活用して、担任がホストとなりクラス単位でのオンライン朝の会が実施されました。

5月11日(月)～22日(金)のうち各学校の実情に合わせて週2～3回ほど行いました。オンライン朝の会はZoomを活用し、子どもたちがお互いの顔を見あえたり、話ができたりしました。各回自由参加ということにもかかわらず多くの児童が参加し、直接先生たちやクラスの友だちと交流しました。わずかな時間ではありましたが、久しぶりの朝の会に、各学校の教室にはにぎやかな時間が流れていました。

学校再開に向けた試金石の取組でしたが、思わぬ効果もみられました。オンライン朝の会では、「朝」に限定したことで、臨時休業中は不規則になりがち子どもたちにとっては、早起きをして規則正しい生活に変えるきっかけとなったケースもありました。

6年担任の先生方からは、「子どもの元気な姿を見ることができ、子ども同士も久しぶりの

やり取りに嬉しそうであった。」「子どもだけでなく、教師もホッとした。」など、やってよかったという声が聞かれました。今後も臨時休業等不測の事態の折には、また取り組んでいきたいという声も多く寄せられました。

この「オンライン朝の会」の取組が、オンデマンド授業動画の作成やオンライン授業の実施が求められる時勢への対応に向けたきっかけになったのではないかと考えています。

こんな時だからこそできること、こんな時だからこそやるべきことをしっかりと考え、学校全体で子どもたちのために協働し、チーム学校として子どもたちのために進んでいきたいと思っています。



## 小中一貫教育を進めていく上での教頭の働き

名張市教頭会 名張市立北中学校 山本 芳 広

昨今の教育現場では、不登校児童生徒の増加や人間関係の希薄さとSNSの普及に伴う生徒間のトラブル、中1ギャップをはじめとした生活面における課題などが大きな教育課題となっている。中学校へ入学するタイミングでは、子どもたちに様々な変化が訪れる。新しい環境に慣れず力を発揮しにくい子どもや周囲になじめず疎外・いじめの要因を生じさせてしまうケースもある。よって、小中一貫教育により小中学校間の情報交換が密になり、児童生徒に対するきめ細かで適切な対応を効果的になされれば、課題解決への重要な取組となる。更には、小中学校間の連携を深め「小中一貫カリキュラム」に基づく義務教育9年間の学習指導と生活指導の円滑な接続や連続性を図った教育活動という面で小中一貫教育は有効であると考えられる。

名張市でも小中一貫教育に向けて昨年度中に各中学校区で、小中学校の教職員が子どもの実態を共有し、中学校区の「めざす子ども像」および「教育目標」を掲げ、小中学校が一体となるランドデザインを作成し、つけたい力や軸となる取組、活動の具体的実践を協議した。その中で見えてきた課題を『小中一貫教育を進めていく上での教頭の働き』として重点課題として取り組んだ。

小中一貫教育を実施するにあたっては、中学校校移転に係る校区再編に向けての調整や折衝、9年間を見通した小中一貫カリキュラムの編制、

名張に誇りや愛着を持ちながらグローバル社会をたくましく生きる力の育成、特別な支援が必要な子どもたちの支援や引き継ぎ体制の構築、コミュニティ・スクールを基盤とした「地域とともにある学校」づくりの取組等、様々な課題があげられる。と同時に、進めていく際には、関係する小中学校の教職員による打合せや事前・当日準備が必要であるため、教職員の多忙感・負担感の増加が伴うことが懸念される。これらの課題にも対応していくために、教頭として、教職員や保護者、地域と連携しながら、丁寧に取り組んでいくことが要求されるが、難局に対処していくためにも、教頭同士が連携し、取組状況の情報交換を行いながら、次に進むための手立てを考え、取り組んでいくことが大切である。



## ビヨンド・コロナという意識で

津市南地区教頭会 津市立誠美小学校 寺田 正 秋

今年は新型コロナウイルスに関わり、新学期早々より、教育課程や行事の変更など例年どおりが通じないことばかりで、当たり前の日常がいかに貴重であるかを思い知らされました。4・5月は休校中の家庭学習に備えプリントや動画の作成、行事の見直し、6月以降は授業の準備に加え、校舎内の消毒などもあり、多忙な毎日

が続きました。他にも密を避けるため、PTA総会を书面決議としたり、運動会を分散型としたり、家庭訪問を中止にしたりするなどどれも初めてのことばかりでした。校内では休校中も再開後も、必要に応じて学年代表を集め、一つひとつのことに対して、それぞれの立場や経験から知恵を出し合い、対応を協議してきまし

た。対外的な会議や研修についても軒並みオンラインとなり、重要な研修のいくつかについてはプロジェクターを使用し、全員でその内容を視聴することも行いました。新型コロナウイルスは重篤化し、死に至るケースもあり、大きな不安や恐怖を覚えます。つい最近までは、「今後10～15年かかって社会は大きく変化をするだろう」と予測されていましたが、今回は数ヶ月という驚異的な速さで社会や教育を変化させました。7月以降、第2波が全国的に猛威を振るっており、現在はWITH (ON) コロナと言われる状況ですが、AFTER コロナ（終息）となった時に、コロナ以前の状態に戻すのではなく、BEYOND コロナ（コロナを超える）、すなわちコロナを超えて自分たちの考え方や行動をいかに変えて行くべきかが大切だと思います。

現実はい目の前の行事や授業に追われ非常に大変ですが、「何のため」「誰のため」を忘れず、BEYOND コロナを意識しながら、子どもたちや最先端で頑張っている教員のために今、できることを精一杯取り組んでいきたいと思っています。



## 「地域とともにある学校」の実現に向けて

鳥羽市教頭会 鳥羽市立加茂小学校 中村久美

加茂小学校では、児童の豊かな心を育むため、家庭・地域と連携し「地域とともにある学校」の実現に向けて、以下のような活動に重点をおき取組を強化している。

### 1 地域体験学習

保護者や地域の方の協力を得て、継続した米作りや野菜作り体験を実施している。昨年度においても、地域の方々とともに米や大根をたくさん収穫し、子どもたちは達成感や喜びを味わうことができた。地域から学び、地域のよさを認識し、人とのつながりを大切にする児童、郷土を愛し、誇りに思える児童の育成を推進している。

### 2 地域と連携した防災教育と安全確保

保護者・地域・職員・中学生と小学生高学年が連携して、校区危険箇所点検を実施し、ストップマークの張り替え等も行っている。その点検の結果をもとに、地区別で協力し合って命を守る防災マップを作成し、全校の防災学習へつなげている。

また、児童の安全を地域で守るため、保護者・地域ボランティア・職員が連携して早朝より登校指導を行っている。登校指導で保護者が感じたことを集約した加茂小安全だより

を教頭が発行し、児童の安全確保についての啓発活動を定期的に行っている。

### 3 幼・保・小・中の連携した取組

9年間で身につけさせたい力を「表現する力・行動する力・つながる力」とし、小中が連携して人権教育カリキュラムを作成し、発達段階に応じた人権学習を継続的に進めている。また、児童が安心して学校生活を送れるよう、校種間の十分な引継ぎ・保護者との面談・入学前の学校見学・運動会や交流活動等を行っている。

地域とともにある学校づくりをめざし、「チーム加茂」による教育を推進している。



# 「日常」と「非日常」

紀北教頭会 尾鷲市立尾鷲中学校 谷川進悟

コロナ禍の中、社会も学校も、これまでの「日常」が「非日常」となり、当たり前が当たり前ではなくなってしまった。我々教職員も、しばらくの間、子どもたちの命・健康・安全を最優先に、未知の領域の中で試行錯誤の日々を過ごすことになる。

この「日常が非日常となる」といった現象について、私は、自身の人生におけるある体験から、今、深い感慨を持つに至っている。

教頭1年目の平成28年11月、私は人間ドックで、初期の肺がんが発見された。仕事納めの12月28日に手術。悪いところは全て取り除くことができ（そのはずだった）、1月4日には退院。冬休み明けからは、職場へも無事復帰することができた。

しかし、半年後の7月、体調が再び悪化し、小腸への転移が見つかる。8月に、2度目の入院・手術。幸いなことに今回もがんはきれいに切除することができたが、「あなたのがんはヤンチャだ（＝たちが悪い）」ということで、9月から2学期いっぱい病気休暇を取得し、4クルの抗がん剤治療を受けた。

この2回の手術と抗がん剤治療によって、私は、強烈な「日常の非日常化」という洗礼を受けることとなる。手術後は、とにかく「痛い！」の一言。息をする、咳をする、寝返りをうつこ

ともままならない。抗がん剤の副作用は、嘔吐や脱毛はなかったものの、ひどい味覚障害と食欲不振、便秘に悩まされた。味が全くわからない上に食欲が出ない、便秘でお腹も気持ち悪い…ということで食事量は激減。正月を迎える頃には、体重が7キロほど落ちてしまっていた（その後、1か月経たないうちに、見事リバウンドを果たすことになるのだが…）。

私は今、県の「がん教育推進事業」に協力し、時折県内の小中学校を訪問して、がん体験者としてがん教育の授業に携わっている。そして、いつも子どもたちに、命の尊さはもちろんのこと、「当たり前の日常の大切さ」を強く訴えている。毎日家族のいる家で、おいしいごはんが食べられること。学校へ行き、友だちや先生と仲よく勉強できること。暖かい布団の中でのびのびと寝られること。どれも空気のようにありふれた、当たり前存在する情景だけれど、その一つひとつが有難く、なくてはならない貴重な「日常」の一コマだ。子どもたちには、いらぬことに無駄な時間を費やすことなく、当たり前の日常を一瞬でも大切に、有意義な時間をぜひ過ごしてもらいたい。

「日常」が「非日常」となってしまうているコロナ禍の今、その終息とともに、強くそう願わずにはいられない。



# コミュニケーションを大切に

鈴鹿市教頭会 鈴鹿市立深井沢小学校 神原亜矢子

鈴鹿市は小学校34名、中学校12名、計46名の教頭がいます。昨年度、管理職退職者が多かつ

たこともあり、令和2年度は14名の新教頭を迎えました。

年度初めの様々な書類に加え、昨年度末からの新型コロナウイルス関連のメールもたくさん送られ、重点取り組みであるはずの「勤務時間縮減」もどこかへ消え、新教頭だけでなく、すべての教頭が目を回していました。また、鈴鹿市では一人1台Chromebookが支給され、新しいシステムも導入されました。本来は勤務時間縮減のための導入が、慣れない作業にたくさんの教頭が、4月、時間外労働上限45時間を超えるということになってしまいました。

そんな中、鈴鹿市では「勤務時間縮減」に少しでもつなげるため、自主教頭会で小さな取組を行っています。新型コロナウイルス感染諸対策のため、長時間行うことはできませんが、第1回はブロック別に新教頭から悩みを聞き、先輩教頭が答えたり、業務をうまくこなしていくコツなどを話し合ったりしました。

第2回は「夏調査」と「就学時健診」について教育委員会の方々に来ていただき、詳しく説明をしていただきました。また、小中に分かれ、小学校では「就学時健診」の流れについて教頭会役員で説明をしました。関係する様々な文書を養護教諭と協力しながら教頭が準備を行うため、夏調査と重なりとても忙しくなります。中学校では時間外労働45時間を超える教員にどのように声をかけていくかなど情報交換を行いました。

第3回は9月に行われる予定ですが、初めに話したChromebookを教頭としてどのように活用していくと勤務時間縮減になるのかみんなで考えていく予定です。

鈴鹿市教頭会はコミュニケーションを大切にみんなで話し合い「勤務時間縮減」に取り組んでいます。

## 毎朝200枚

度会郡教頭会 度会町立度会中学校 田 辺 宣 昭

新型コロナウイルスの影響で、全国中の教頭先生の日課作業が劇的に増えた。私は出勤したらまず校舎の窓、約200枚を開け、同時にあちらこちら消毒している。どこの学校でも、新型コロナウイルス感染防止のための重点取組として、頻繁に換気や消毒を行っていることだと思う。

去年の今頃は、世の中がこんな状況になるなんて想像もしていなかった。

「まさか、全員がマスクをして授業をせなあかんなんて」

「まさか、無言で前を向いて給食を食べることになるなんて」…。

本来、子どもとは、仲間と近づき、集団の中で育つもの。いわば、「三密」の中で成長していくものだ。グループ学習で意見交流をして多様な考えに触れたり、体育祭でみんなと力を合わせて集団演技を披露したり、文化祭の合唱では仲間の息づかいを感じ、ハーモニーを奏でたりする中で、自他が互いに成長し、集団としてレベルアップする。

しかし、コロナ禍で今までの常識が覆された。サザンの歌が頭の中で響く。

♪ ああ、もうあの頃のことは夢の中へ ~  
帰らぬ思い出 Time goes by ♪

でも、嘆いていてもしょうがない。今、やれ



ることをするしかない。もはやあの「平穏な時代」には戻れない。だからこそ発想の転換が必要で、これからの「ニューノーマル」を生み出すしかない。このコロナ禍だっていつ終息するかわからないし、終息してもまた同じようなことが蔓延するだろう。

例えば、本校の校長はアイデアマンで、木材とビニルシートを買って自作のパーティションで職員室を仕切ってくれた。1セット800円也。まずは自分で動けということか！私は、オンライン授業ができるように本気で勉強するぞ。2021年には全員にタブレットが配られ、ネット環境が整備される。「想定外は想定内」。ありとあらゆる場面を想定し、対応していきたい。

# ICT機器の利活用について

松阪市教頭会 松阪市立三雲中学校 後藤正和

本校は、2011年度に総務省と文部科学省からICT教育の実践校に指定されて10年がたちました。以降、生徒も教師も一人1台のタブレットを持ち、各教室に1台の大型IWB（電子黒板）の環境下、授業での利活用をはじめ、家庭学習教材、朝の健康観察、カラーの学級通信、各種アンケート、生徒会役員選挙の電子投票、教師用掲示板、職員会議等の資料のペーパーレス化…毎日、様々な場面で使用されるICT機器は、今では私たちにとってなくてはならないツールであり、三雲中学校の文化の一部になっています。

学校目標である「自立・協働・創造」のもと、生徒が卒業後、変化の激しい社会の中で自由に活躍できる資質や能力の育成をめざしています。すべての教科で「協働学習（子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学習形態）」を取り入れ、生徒の対話的・主体的な学びを通して深い学びにつながっていくよう授業改革を行っています。その中でICT機器が大事なツールとして活躍しています。

毎年教職員の入れ替わりがある公立中学校では、タブレットのノウハウをどう引継ぎ、どう発展させていくかが課題になっています。本校では、校内研修会やミニ研修会、雑談研修会の中で研鑽を積んでいます。また、各教科の指導案データ蓄積をはじめ、今後各教科のデータ共有化についても議論しながら、働き方改革にもつながる利活用を進めていきたいと考えています。

国のGIGAスクール構想を受け、松阪市でも全小中学校で一人1台のタブレット導入が決まりました。また、今年は新型コロナウイルス感染症対策による2度にわたる休業措置など不安定な社会情勢の中、「オンライン教材」の利活用など家庭学習の充実やWEB会議ツールの利活用等、ますますICT機器が必要不可欠となっています。

私は、校内でもアナログをこよなく愛している数少ない一人ですが、時代の流れに対応すべく日々タブレットと向き合っています。



# 四日市市小学校教頭会の取組

四日市市小学校教頭会

四日市市立海蔵小学校 酒 匂 秀 人

現在、四日市市には小学校が37校あり、内2校は複数配置で、合計39名が本会に所属し、活動しています。

主な活動内容は以下の3つです。

- ① 8月以外の毎月1回の定例会（ブロック別研修・課題別研修）
- ② 各種研修
- ③ 定例会後の役員会・理事会

## ① 8月以外の毎月1回の定例会・ブロック別研修・課題別研修

教育委員会からの指示伝達や県教頭会の報告や連絡をしています。

その後、ブロック別研修と課題別研修を行っています。

ブロック別研修会では、中学校区をもとにしたAからEの5ブロックに分かれて、予め役員会・理事会で決めたテーマ（例コロナ対応・運動会など）とともに、各会員から出された話題について情報共有したり検討したりします。わたしも1年目のときには、様々なことを気軽に聞ける場として、とても有意義に時間を過ごすことができました。

課題別研修会では、まず、年度の初めに、i 教育課程、ii 子どもの発達、iii 教育環境整備、iv 組織・運営、v 教頭の職務の5つの中から所属課題を決めます。次に、各課題別に設定した

主題をもとに、調査・研究をし、レポートにまとめ、1,2月の定例会で発表をします。資料は有効活用しています。

## ② 各種研修

先述のブロック別研修・課題別研修に加え、次の4つの研修も行っています。

- i 教育委員会の2名の課長から講話（一昨年度までは毎年全課長でしたが、教頭会時間短縮のため）（写真1参照）
- ii 8月に教育支援課による夏季研修会・人権同和教育課による研修会
- iii 教育支援課との共催研修
- iv 校長会代表の先生から講話

## ③ 役員・理事会（写真2参照）

一昨年度までは、役員・理事会を定例会とは別日に行っていましたが、役員・理事の出張を減らすために、現在は定例会後に和気あいあいと行っています。

主な話題は、当月のブロック別研修会で出された内容の確認、次月の定例会について（ブロック別研修会のテーマなど）です。

各ブロックの理事は、ブロック別研修会の記録をまとめ、副会長がそれらを一つにまとめた文書を次月の定例会で伝達、配付し、全体での還流を図っています。



写真1 7月定例会のなかの教育支援課長の講話の様子



写真2 定例会後の役員・理事会の様子

## 「横のつながり」を大切に

伊賀市教頭会 伊賀市立上野南中学校 藤山正道

伊賀市教頭会は、30名の会員が「横のつながりを大切に」をスローガンに、年8回の研修会を行うなど、活発に活動をしています。

「横のつながり」とは、会員同士が互いに教え合い、助け合い、楽しみ合う「つながり」を作ろうということです。具体的には、研修会の中で、「教育研究部会」「経営研究部会」「法制研究部会」の3つの部会に分かれてテーマ別に研究を行い、各校の取組の交流を進めています。交流会では、提出文書の処理方法を教え合ったり、他の学校でも使えるような実践を部会員で共有したり、親睦のための様々な催しを行ったりするなどの活動を行っています。

伊賀市の特徴的な取組としては、年1回の講演会活動があります。最近の2年間は、HUGやクロスロードを会員同士で行うことにより、災害についての認識を新たにしている活動を行いました。

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、例年以上に「横のつながり」を大切に

取組を進めています。研修会での交流内容も新型コロナウイルス対策や、休校に伴う授業時間の確保などの話題が多くなっています。また、働き方改革の取組も今年度の重要課題です。各校の取組を交流し、自分の学校の取組に取り入れるようにしています。例年以上に学校運営上の課題が山積している時だからこそ、「横のつながり」を大切に、みんなで乗り越えていきたいと考えています。



研修会が行われる伊賀市教育研究センター 外観

## 卓上シールド

亀山市教頭会 亀山市立関小学校 谷伸

新型コロナウイルス感染症対策のために、亀山市では臨時休業からの学校再開にあわせて、児童生徒用の机に卓上シールドが設置されました。これにより、教師も児童生徒も安心して授業を行うことができます。しかし、安全安心が得られた一方で、教室全体に圧迫感が生まれま



した。また机と机との距離をとらざるを得ないため、以前よりも通路が狭く感じます。教師も児童も教室の中を移動するときに卓上シールドとぶつかってしまうこともたびたびです。また、子どもたちは授業中卓上シールドの透明部分から黒板を見ることとなります。子どもたちからは、視界がゆがんで前方が見にくいとの指摘もありました。このように安全を確保するために、今までなかったものをつけるといういろいろと不便なこともあります。しかし、これからの熱中症が心配される季節でもシールド内ではマスクを外してもいいので、子どもたちは安心して授業を受けることができます。

卓上シールドで安心感が増しましたが、教職員の負担となっているのが校舎内の消毒作業です。目に見えないウイルスを除去する作業とな

りますから、手間も時間もかかります。ご承知の通り、教職員は放課後に教材研究や教育にまつわる相談、研修会や会議などを行っています。当番制にしてみたものの、消毒作業のために業務を中断せざるを得ません。全国の学校同様、私の勤務する亀山市立関小学校でも感染症拡大防止のため、放課後（子どもの下校後）に教職員が分担をして多くの子どもが手に触れる箇所（ドアノブ、手すり、スイッチなど）を消毒していました。そこで関小学校学校運営協議会の場で、教職員の実情を伝え、校内消毒の学校支援ボランティアの募集を呼び掛けてもらいました。そうしたところ、現在では13名の方からご賛同を得て、校内消毒をいただいています。これにより教職員の消毒作業にかかる時間が削減され、校務に集中することができ、大変助か



っています。学校が困っているときに協力していただける“学校の応援団”がたくさん集まっていただけというのは本当にありがたいことです。

## 趣味・トピックス

### 愛犬コロとの別れ

松阪市立阿坂小学校 森 健

2020年1月16日木曜日。

14年間一緒に過ごした愛犬コロが天国へと旅立ちました。

14年前、娘が犬を飼いたいと言ったので、ペットショップへ行きました。その時、まだ耳がたれていた子犬の柴犬と目が合いました。とても愛らしい目で見つめてきました。この子を家に連れ帰りました。しかし、私たち家族が犬の飼育に慣れていないせいか、よく甘噛みをしてきて困りました。甘噛みを直すために厳しいしつけもしましたが、あまり効果がありませんでした。その後、自然に接するようにしたらうまく懐いてくれました。それから、コロは家族の一員となって癒やしの存在となりました。家族のみんなは何か嫌なことがあるとコロの所へ行って話を聞いてもらっていました。

コロが家にやってきたとき、子どもは中学生や小学生でしたが、今では社会人になって働いています。子どもたちはコロといっしょに成長してきましたといっても過言ではありません。娘が特にかわいがっていましたが、娘が就職のため家を離れてから、コロは寝ていることが多くなりました。私

も妻もコロと遊ぶ時間を増やしてみましたが、やっぱり娘のパワーには勝てなかったらしく、今年の正月の後、コロは体調を崩しました。そのことを聞いて娘がようすを見に来てくれました。安心したのか、コロは天国へ旅立ちました。

コロが天国へ旅立ってから思うことは、私たち家族にとってコロは本当に大きな存在だったんだなということです。

コロちゃん、長い間ありがとう。



## 皆さんの学校には、明治の頃の有名人が書いた額は残っていませんか？

四日市市立内部小学校 山田賢治

一人の医者が江戸時代にタイムスリップするというドラマを観たことがありますか。コロナ禍の外出自粛の中、再放送されていましたが、私はこのドラマに登場する「稲むらの火」で有名な濱口儀兵衛や、緒方洪庵、佐久間象山などの墓碑を、20代後半頃から趣味の一つとして訪ね歩いていました。幕末から明治にかけて活躍した有名人の墓碑は「明治の三筆」の日下部鳴鶴（めいかく：名は東作）や巖谷一六（いわや いちろく：名は修）が数多く書しており、私はその書風を研究していたからです。

皆さんの学校には、明治の頃、有名人によって書かれた碑や額は残っていませんか？

四日市市内に残るいくつかを紹介します。

### ○日永小学校「日永学校」額 巖谷一六の書（明治14年）

明治15年2階建ての校舎を新築したときに掲げられた。

### ○富田小学校「富田学校」額 山岡鉄舟の書

鉄舟（通称名は鐵太郎）は、勝海舟、高橋泥舟とともに「幕末の三舟」と称される。揮毫の経緯は不明（未調査）だが、鉄舟は西郷隆盛の依頼により明治5年から明治天皇の侍従となる。東海道に面した校門脇に「明治天皇御駐輦跡」（四度の来訪）の碑もあり、明治7年の富田学校開校記念に依頼したのではないか。

### ○内部小学校「惟義是重（おもうにぎはこれおもし）」額 尾崎号堂（名は行雄）の書

尾崎行雄は「憲政の神様」と呼ばれる。昭和12年講堂完成時に掲げられた。現在はうつべ町かど

博物館に展示されている。

### ○四郷小学校「伊藤小左衛門之碑」 金井金洞の書（明治19年）

金井金洞（名は之恭：ゆきやす）は、貴族院勅撰議員（揮毫時は内閣大書記官）。この碑は最初、市内の諏訪神社に建立されたが、昭和51年、四郷小学校創立百周年を機に同校校庭に移設。

明治の頃の学校は、地域の有力者が私財をなげうって建てられたものが多かったようです。学校の正面玄関に掲げられる額などを有名な人物に揮毫してもらい、立派なものにすることは、地域の誇りでもあったのではないのでしょうか。

明治の三筆の一人、巖谷一六の書は、北勢町麻生田「麻生神社」額、菰野町菰野「藤枝氏碑」、四日市市川島町「川島神社」額、鈴鹿市神戸城跡「竹軒先生之碑」、偕楽公園「松本宗一君之碑」、伊賀市種生「兼好法師遺跡碑」等、県内各地で見ることができます。

一方、日下部鳴鶴の書は、紀伊長島町の西田家に残された六曲一双の屏風や松阪市歴史民俗資料館の「国産松阪木綿商」額、松阪市西黒部町の「意非多神社」額、鳥羽市二見の賓日館にある額等が残されていますが、碑（たくさんの文字が書かれた物）は一つもありません。

学校に残っている額は、公になっていない物が多く、100年以上経っていることから保存状態も悪く、このまま忘れ去られたり処分されたりすることが考えられます。ご一報くださればよろこんで調査します。でも教頭のうちは無理です。退職してからだと思えます。まずはご一報を。

